

宗吉と古川伊喜右衛門が戸の口用水路を見つめていたのです。そのわきに小屋が建てられ、「会津藩御用」の旗が湖水を渡る風になびいていました。

「いよいよですね。」

「うん、いよいよだ。二人にも苦勞をかけるが、よろしく頼む。」

「はい、これだけは何としてもやりとげます。先祖の切り開いた水路ですから、私たちがやらなければ、ご先祖さまに申しわけありません。」

三人の顔はひきしまり、固い決意がうかがわれます。

猪苗代湖から若松まで続く用水路の幅を、今までの二倍の三・六メートルに広げ、深さも六十センチほど掘り下げようというのです。二百十日に水のせき止めを始めたのですが、付近の農民を人夫にするために、本格的な工事は稲のとり入れが終わってから始められました。

戸の口から大野が原を横切るあたりまでは、工事は順調に進みました。どこ